

Title	日歐通交史(幸田成友著, 岩波書店發行)
Sub Title	
Author	高村, 象平(Takamura, Shohei)
Publisher	三田史学会
Publication year	1943
Jtitle	史学 Vol.21, No.2 (1943. 2) ,p.134(276)- 136(278)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19430200-0135

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

化的盛衰に就いて凝視して來た間に、折に觸れ時に當つて書かれたものの中、興味中心の三十六篇だけ集めて一冊として公にせられたものである。

史論の卷の第二に、文化の融合なる題目の下に、簡單ではあるが著者の過去三十五年間の研究の對象が述べられてゐる。著者は今より三十五年前に東西文化の融合の歴史的變遷を考慮し、爾來最も東西文化の接觸せる近東又はバルカン地方を研究せられた。その研究の結果——勿論その一部分ではあるが——を表現せる本書が東西文化の融合なる題名を附せられてゐるのも當然の事と思ふ。

内容は折に觸れて新聞や雑誌に書かれたもの、又は講演せられたものの速記などであり、回教の卷を除いては幾分雜然たる感を受けるのは止むを得ざる事であらう。又大東亞戰爭勃發後の今日の情勢からすれば、幾分實情の異なる點もあるが、之も又止むを得ざることである。

然しトルコ絨氈考、トルコの影繪芝居等の興味深き研究を初めとし、名稱の變遷に依り歴史が判明する如き感を抱かせるイスマンブール名稱考、日本人の旅行者が殆ど歩かざる地を紹介せる黒海岸、コーカサス、西アジアの旅行記、西歐の知識により在來曖昧に説明せられてゐたラマザン、祈禱作法、教義等を明確に紹介せられた回教の卷の各論文等、西亞東歐の文化的實情を學ぶためには、容易に他の書に於て發見し能はざる多くの内容を盛つて居り、且つ西亞の旅行記、西亞の文化的本質、回教は著者の最も研

究せられた所であり、蓋し最も權威ある名論と考へられ、東洋史や西洋史を學ぶものは勿論、廣く東西文化の接觸について學ぶものには是非一讀をすすめたいものである。又史論に於ても、時代の推移に深く注視せられてゐる著者の論文が、一般の歴史家に對して多くの指針を與へてくれるものであると考へる。(田中荆三)

日歐通交史

(幸田成友著)
岩波書店發行

こと數年來上梓の擧あることを伺つてその實現の一日も速かならんことを待望してゐた幸田博士の「日歐通交史」が過日世に送り出された。博士自身は序文において「本書は初期日歐外交史の入門と稱すべきである」と謙遜されてゐるが、それは素より當らない。その内容は、室町幕府末期における葡萄牙人の初來に筆を起し、江戸幕府初期に彼等の來朝が嚴禁され和蘭人のみが長崎出島で交易を許されるに至る約百年に亘つての詳細な日歐通交史に關する「研究書」である。

本書については既に諸雑誌や新聞やに多くの紹介乃至評言が掲載されてゐるのであつて、今更私の如きが蕪辭をつらねて書評を敢てする要は毛頭ない。それにも拘らず本誌編輯者の嚴命には黙し難いものがあり遂にここに筆を執るに至つた。恐らくこれは曩日私が「日葡交通史」と題する小著を公けにしたことに關聯しての指名であらう。私情をこの公器をかりて述べるのは洵に恐縮であるが、右の拙著は幾多の先學の勞作からの文字通りの編著とでもいふべきものであつて、今にして思へば、若しその脱稿以前に

幸田博士の本書が上梓されてゐたならば、少くとも拙著の前半部分の成稿にどれほど大きな便益が與へられたことであつたらう。それと同時に、敢て拙稿を印刷に附する勇氣が出なかつたかもしれないのであつた。素々私は中世北歐經濟史に非才を投じてゐる者であるから、亞歐貿易史の一環としての日葡交通の跡を尋ねることは極めて難事であつた。殊に中世末より近世初頭にかけての我が國の諸事情については、甚だ恥しいことであるが極めてうとく、そのために拙著の中には幾多の過誤が重ねられてゐることであらうと惧れること大なるものがある。例へば絲割符の起源についても、私は絲割符御由緒や絲亂記に據る通説には組し得ず、かなり大膽とは思はぬこともなかつたが、絲割符商法は江戸幕府の生絲貿易統制策の現はれに外ならぬと斷定して置いた。然しその論斷が果して正鵠を得てゐるや否や危懼の念なきを得なかつた。然るに博士の本書を拜見して(二〇五、二二二、二二九頁)、大體私の推斷が誤りでなかつたことを知ることが出來た。かくの如きは本書の出版が私にとつて甚だ難有く感じられた一例に過ぎず、尙他には叱正を受くべき箇所が多々存するであらうことを自覺してゐる。

扱て「日歐通交史」の構成や個々の内容についてここに述べることは今日に至つては最早無用であると考へられるから、ここには偶々同種の問題に一時なりとも關與した私が本書を通讀して氣付いた箇所を掲げることにした。

先づ本書において博士が周到な文獻考證により從來の通説を破

碎されたところは多々存するが、その中でとりわけ論旨明快なものと特に指摘したい箇所は、前記の絲割符起源の他に次のものがある。即ちアダムスの「未知の友人及び國人へ」と題する書翰と、英吉利東印度會社の日本通商決意との關聯についての否認(二一八頁)、同社の對日貿易による損失額を一萬磅以内とされた點(三〇二―三頁)、寛永鎖國令における貿易取締條項の強調(三四二、三四四頁)、島原亂は切支丹一揆に非ずとの論斷(三五五頁)、抛銀における組合出資の指摘(三六六―七頁)、葡萄牙人追放令が本邦商人に及ぼした影響(三七二―三頁)、長崎移轉についての和蘭商館側の準備行動とその移轉經過及び商館長カロン等の所商人反對運動についての記述(三四七―八、三七三―八二頁)等である。又山田長政の渡暹及び死期の年代考證(三九六頁)もこれに屬する。いづれも少くとも私にとつて甚大な教示を得たものとして銘記した箇所である。

この他方において疑問となつた箇所が若干ある。第一は慶長十五年ビペロの墨西哥歸國に際して同行した京都商人田中勝介等の渡航目的とその携行した商品種類である(一九六、一九八頁)。第二は同じく墨西哥との貿易を期待した伊達政宗が、元和二年西班牙使節歸國の際便乗せしめた商人皆川與五郎等の輸出商品の如何である(二七四―五頁)。若しこれ等が明かにされたならば、例令これ等の擧は失敗に終つたものであつても、廣い意味の日歐通交史における本邦商人の對外進出の一樣相が窺はれることにもならうと考へるのは私の思ひ過しであらうか。第三に外國行の邦船に

葡萄牙の水先案内を雇入れた習慣の起源とその意義(三二八頁)も、私の示教を得たい點である。これは嘗てボクサー氏の論稿によつて知つて以來、今尙解けぬ私の疑問となつてゐる。右の三點は恐らくそのすべてが私の寡聞に出づるものであらうと思ふのであるが、私としては多少なりとも本書中に關説していただきたいかつた箇所である。尙これに類する希望としては、英吉利商館の代理店の店主や通譯についての記述は、興味深く讀んだのであるが(二三九頁)、同時にこれ等として雇傭された邦人について一二の例證が加へられてゐたならば、一層興趣を増したと考へられる。又圖版が多く挿入されてゐる本書のこと故、序でにマカオで印刷されたポニファッショの「正しき兒童教育」なり、サンデの「日本使節記」なり(一三七頁)、いづれかの寫眞版でも添加していただきたかつたと思つたことである。この他に明かに誤植と考へられる箇所が一二存するが、それ等は博士が小生宛の私信に寛永鎖國令について述べられた箇所と共に、いづれ重版の折に訂正されることであらうからここには掲げない。

以上普通の書評とは異つた形式の讀後感を書きつらねた。本書の眞價は既に多くの識者によつて稱讚せられたところによつて明かである。私の疑問とし又希望した事柄はすべて些細なものであつて、その有無によつて本書の價値が傷つけられるやうなものではないことは斷るまでもない。恐らく本誌の讀者は既に本書に親しまれてゐることと信ずるのであるが、萬一さうでなかつたならば何や彼といはずに先づ第一に本書に接して多年に亙る博士の研鑽

の並々ならぬことを偲び、同時に本書に示された初期日歐交通の事蹟を已がものとするのが一番大切なことであるとせねばならない。(高村象平)

寄贈交換圖書雜誌目錄

- 日本農耕文化の起原
- 蓬左狂者傳
- 尾張國名蹟略志考
- 支那城郭の概要
- 國體宣揚史綱
- 立命館大學論叢 第二輯第六輯
- 中世日支通交貿易史の研究
- 顧鄉屯 第二輯
- 日本文化史論
- 行政院文物保管委員會年刊
- 遼陽
- 回教圈 五ノ九、十、十一、十二ノ六ノ一、二、三、四、五、六、七、八、九
- 佛教研究 五ノ三、四、五、六、六ノ一、二、三
- 相武研究 一〇ノ九、十、十一、十二
- 長崎談叢 二八、二九、三〇
- 神社精神文化 五
- 斯道文庫報 五、六、七、八、九、十、十一
- 支那派遣軍總司令部
- 國史回顧會
- 立命館大學
- 刀江書院
- 滿洲國民生部
- 松本彦次郎
- 中華民國日本大使館
- 滿洲古蹟古物名勝天然記念物保存協會
- 回教圈研究所
- 佛教研究會
- 武相考古會
- 長崎史談會
- 神社精神文化研究所
- 斯道文庫